『西南アジア研究』No. 32, 1990

紀元前4千年紀後半のイラン高原における追込み猟と「ユーズ」の利用について

藤 井 純 夫

1. はじめに

細部の方式に多少の相違はあっても,獲物を限定された場所に誘導することによって,その獲物に固有の優れた動きを制御し,主たる攻撃力を削減すれば,これは広義の追込み猟である。従ってマンモスを沼地に追い込むとか,鹿を崖から追い落とす,などといった狩猟法も広義の追込み猟には相違ないから,追い込み猟それ自体の歴史は必ずしも新しいものではあるまい。しかし追い込み先の施設を人類自ら製作し,そのことによって追込み猟の実施場所を自由に選択できるようになったのは,そう古いことではないように思われる。

ではそういった意味での本来の追込み猟——つまり追込み先を任意に選択し,そこに何等かの施設を設けた上で,獲物を誘導する追込み猟——は,どの様な歴史を持つのであろうか。またそれが開発されたことによって,狩猟具や狩猟法にどういった変化がもたらされ,社会はどう変貌したのであろうか。

筆者は以前に,西アジアにおける追込み猟の一例として,レヴァント地方内陸部のカイト・サイト“kite site”について述べたことがある[藤井:1987]。カイト・サイトとは,群生動物の移動経路に自然石を積み上げて扇状の誘導壁を設け,その開口部から(扇の付け根に当たる)囲い場に群れを導くことによって,獲物を一網打尽にする大型の狩猟施設遺構のことである。今世紀初頭に低空飛行のプロペラ機によって本格的に認知され,上空から見た際の平面型が洋凧(“kite”)に似ていることから,その名が付けられた。

カイトにおける狩猟の対象は,群生の有蹄類(特にガゼルなど)である。そうした有蹄類の移動路は,内陸部特有の自然地形を反映してワディ面に添っていることが多いので,カイトもまた多くの場合ワディ周辺に設置された。また狩猟する側の人間は囲い場の外

側に潜み,動物の突進と右往左往の大混乱の中で,弓や槍などの武器を行使したと考えられている。事実,そのための石器が囲い場の内外から,言わば原位置の状態で出土している。最近の研究では,レヴァント地方内陸部のカイトによる狩猟活動は,終末期旧石器時代からごく近代まで,永く営まれたことが判明しつつある[Helms and Betts：1987]。

ではレヴァント地方内陸部以外の地域ではどうかというと,カイト・サイトが無いのはもちろん,それ以外の型式の追込み猟についてもその痕跡は判然としないのである。唯一の例外がアッシュール・バニバル宮殿の狩猟図浮彫[Barnett：1975]であるが,この資料とカイト・サイトの全盛期との間には実に数千年の空白が残されている。従って,レヴァント地方内陸部を除けば追込み猟の歴史,と言うより追込み猟を含めた狩猟活動全般の「ソフト」の部分は,まったくと言ってよいほど分かっていないのが現状である。なぜなら従来の議論が,——資料上の制約のためではあるけれども——ひたすらその「ハード」の部分,すなわち石器や青銅製の狩猟関係遺物の問題のみに集中してきたからである。

考古学という学問の特質上,そのこと自体はやむを得ないにしても,そこから導き出される結論には,ある種の偏向が付きまとうことを認めざるを得ない。中でも注意せねばならないのは,狩猟関係遺物の多寡と狩猟活動の盛衰との相関関係である。我々は好むと好まざるとに関わらず,これを単純な比例の関係で捉えてしまう傾向があるのではなかろうか。狩猟関係遺物の隆盛は即座に狩猟活動自体の隆盛を意味し,逆はすなわち狩猟活動の後退と表裏一体という捉え方——そうした図式がもし実状以上に誇張されて一人歩きしているとすれば,これはやはり是正すべきであろう。多くの民俗例が証明しているように,狩猟活動が常に多量の武器を必要とするとは限らないからである[Oswalt：1976]。武器の必要性の大小も結局は狩猟方法次第であって,狩猟関係遺物の多寡が必ずしも狩猟活動全般の盛衰と正確に連動しているとは限らないのである。

しかし現状では,新石器時代以後の西アジア社会があたかも農耕一本槍の特殊社会であったかのようなイメージが流布している。これは大いに再考の余地があろう。筆者がカイト・サイトに代表される追込み猟の系譜を重視しているのも,正にそのためである。無論,この種の問題は追跡が困難であることを覚悟せねばならない。レヴァント地方内陸部の場合は,たまたまその地勢上の条件から特異な型式の石垣が組まれ,それが遺構として残っているために追込み猟の存在が判明した訳であるが,例えばアッシリアの浮彫のように,網による追込み猟が実施された場合は,遺物・遺構は何も残らないであろう。石材の乏しい平野部では,こうした網による追込み猟が実施された可能性は大いに有り

得る。もしそうだと仮定すると,内陸部を除く西アジア世界に追込み猟の資料が少ないのも当然であろう。そしてそのことが一層,内陸部のカイト・サイトを特異な存在として孤立化させ,他に波及しない問題として等閑視させる原因を成しているのではなかろうか。

ところが今回,レヴァント地方内陸部ではなく,実に意外なところで追込み猟の存在を明示する資料を確認した。しかも猟犬を手綱で自由に操ることによって(そしておそらくはチータをも使って)獲物を――内陸部のように固定の石垣にではなく――移動の容易な網に追い込むという形式の追込み猟である。この資料は,レヴァント地方内陸部の先土器新石器文化からアッシリアまでの間,無慮5千年は飛び離れていた追込み猟の系譜に,有力な中間点を設定するものである。しかも追込み猟の地域的な広がりの面でも重視すべき資料である。

小稿ではこの資料について紹介し,文様の分析を通して,紀元前4千年紀後半のイラン高原に捕獲網を用いた追込み猟が実施されていたこと,そしてその際には猟犬とおそらくはチータ(イスラームの史料に見える「ユーズ」)が既に用いられていたことを示したい。

2. 資料の由来と基礎的データ

本年4月頃,筆者は古代オリエント博物館主任研究員,堀晄氏より重要な資料の存在を教示された(図1～2)。まず資料の由来について,氏のメモを要約して紹介しておこう。

(1) 1986年10月,(堀氏は)ニムルト・ダー(トルコ)における調査・撮影からの帰途,陸路でイランに入り,テヘランを訪問した。その際,ガラス・陶芸美術館(Glass and Ceramics Museum of Iran, Jomhouri-e Eslami Ave., Siom-e Tir Ave., No.55)を見学し,この資料に遭遇した。館名に象徴されるようにこの美術館ではガラスや陶器がメインで,先史時代の彩文土器はあまり重視されていない。そのせいか問題の資料は,階段の踊り場に無造作に展示してあった。従ってこれまで全く注目されていなかった資料である。

(2) 資料の写真撮影許可が下りなかったため,同館販売のカラー・スライド(135サイズ)を購入した。なお,小稿の写真図版(図1)はそのスライドから作製したものである。画質が悪いが,これはデューブによって量産される販売スライド(従って元々画質が悪い)から,更にインター・ネガを介してモノクロの紙焼きを製作したためである。

(3) 資料自体の写真撮影はできなかったが,館長の好意によって,資料の傍らに展示されていた(主要文様部分の)実測図パネルを撮影できた。帰国後これを紙焼きにし,トレースして図化したのが図2である。(ただし図1と比較すれば分かるように,実測図の方は

図1　追込み猟を表現した彩文土器(テヘラン,ガラス・陶芸美術館所蔵)

土器の彩文全体を網羅している訳ではない。すなわち最下段の彩文帯は省略され,その上段の主要文様帯のみを対象としている。)

次に資料のデータに付いては,下記のような内容の教示をいただいた。

(1)　美術館のキャプションによると,この彩文土器の出土地・年代は,「ネハヴァンド地方出土,紀元前3,500年頃」であった。

図2　主要文様帯実測図

(2)　土器の高さは約55cm。この数値は，その場に計測具の持ち合わせがなかった堀氏が指を広げて計ったものである。従って必ずしも正確ではない。しかし5cmを越える誤差はないと堀氏は確約している。(なお，この数値を基に写真から筆者が算定したところ，土器の胴部最大径は約50cmである。主要文様帯の直経は約46cmである。図2に付記した？マーク付きの縮尺は，この概算を基にしたものである。)

(3)　彩文の色は，ほとんど黒に近かった。

(4)　貼付文の周囲からの比高は5mm位であった。

筆者がこの資料の存在を教示していただいた段階では，(まるで鵜飼の鵜のように)手綱で猟犬を自由に操って獲物を追う特殊な狩猟法を描いた彩文土器資料としてであった。

しかし追込み猟の系譜を辿る作業を進めていた筆者にとっては,この彩文土器の文様が別の意味で一層重要であることが直感された。土器に描かれた幾何学文の一部が,追込み猟に使用する捕獲網を意味すると判断されたからである。従ってこの彩文土器の文様は,猟犬を用いた単なる追い立てを意味するばかりでなく,予め設置されている捕獲網に獲物を追い込む狩猟光景を描いたものであると推測された。これは正にカイト・サイトの流れを汲む狩猟法であって,追込み猟のイラン版ではないか。本資料に筆者が着目した理由もこの点にある。

更にもう一つ注目されるのが,イスラームの史料に言うところの「ユーズ」との関係である。これまでの通説では,彩文土器に斑紋のあるネコ科動物が描かれていると即座に豹(leopard, *Panthera pardus*)であると同定してきた。そしてそれがヤギやレイヨウを襲っていると,すなわち動物闘争文とするのがお決まりの公式であった。しかし本資料を検討するとそれが獲物の側に属する動物ではなく,むしろ猟師や猟犬の側に組する猟獣であることが判明する。従ってそれは豹ではなく,実は『カーブースの書』などに見える「ユーズ」,つまりチータ(cheetah, *Acinonyx jubatus*)ではないかと考えられる。となるとこの種の文様も闘争文ではなく,素直に狩猟文と解してよいのではないか。これが本資料の重要性の第二点である。

なお本資料は一見して明らかに,テペ・ギヤン VD 層[Contenau and Ghirshman : 1933],ないしはテペ・シアルクⅢ-6,7層[Ghirshman : 1938]の前後に位置づけられる彩文土器である。すなわち紀元前4千年紀の後半,特に末頃である。美術館のキャプション(紀元前3,500年頃)は,これよりもやや古い年代を示しているが,おそらく幅をもたせてテペ・ギヤン第Ⅴ層ないしはテペ・シアルク第Ⅲ層という大まかな年代比定を示したためであろう。小稿の考察目的からすればこれでも十分であるが,器形及び文様細部を検討すると上記のように絞り込めるということだけを述べておく。ここではその詳細を述べる必要はあるまいから省略して,文様の分析に移りたい。

3. 文様の分析

記載の便宜上,主要な文様要素を以下に述べる略号で示す。

まず,約90度ごとに大きく描かれている有角の有蹄類動物(おそらくレイヨウ,アイベックスの類)に着目し,Ungulate の頭文字をとって,時計周りにU1～U4とする。次に,この有蹄類の間に描かれた3人の人物を,それぞれH1～H3とする。(この人物の性格ははっきりしない。直接の狩猟者であれば Hunter であるが,単なる勢子であれば

Beaterである。ここではとりあえず前者を採ってHを頭文字にした。)なお,各人物に率いられた犬に言及する場合は,例えばH1の猟犬というように述べる。一方,体表に斑紋のあるネコ科の動物は,後述するようにおそらくチータ(Cheetah)であると考えられるので,C1～C3とする。その他にも各種の幾可学文や鳥,魚などの文様があるが,これらには記号を付けず,単にU1右上の魚文などといったように記す。

まず,最初に文様全体の構成について考えてみよう。U1～U4だけが(彩文を伴う)貼付文であり,しかもほぼ正確な対称性を示している点に着目したい。これに対して,他の文様は器面への粘土付加を伴わないという意味で純粋の彩文であり,なおかつ対称性を相当崩している。従ってこの両者の間には明らかな性格の相違が認められ,それを根拠として施文全般の手順を予想できる。

まず器面調整の段階に前後して,円周をほぼ四等分した位置にU1～U4を貼付ける。最終的な施文段階になってこの貼付文に彩文を施すと同時に,残された空間を各種の彩文で埋めたのであろう。当然のことながら,その際にもU1～U4によって設定された当初の対称性はある程度意識されたらしく,H1～H3がうまく有蹄類動物文の間を埋めている。しかし,U1とU2の間の空間には人物の姿はなく,C1が一際大きく描かれ,全体の均衡を破っている。

またC1の描写がU2の角部分によって制約を受け,頭部が中途反端で終わっている点にも注目したい(ただし空間に余裕のある場合もこうした頭部描写の例は意外に多い。その意味については後述)。このことによっても,貼付文であるU1～U4の先行性と彩文であるH1～H3およびC1～C3の後続性が裏付けられよう。なお,貼付文あるいは彩文における各要素の順位性については不明であり,ここではあえて考察する必要もなかろう。

次に図像の解釈についてだが,本資料のメイン・テーマが猟犬を用いた狩猟であることは一目瞭然であろう。

まず猟師について述べると,猟師はいずれも先の尖った独特の長靴を履いている。これは明らかに革製で,紀元前3千年紀のスタンプ印章の文様や,前2千年紀初頭のアッシリア・コロニー(キュル・テペなど)出土の彩文形象土器,あるいは前1千年紀の磨研形象土器などに見られる靴と同型式である。服装については判然としないが,両足をやや開き,両手を挙げた姿勢が正面観から描かれている。ただし,H1およびH2では頭部が横を向いていることが強調されている。

H1～H3に伴う猟犬は10頭内外であるが,その中には猟師の手綱で操縦されている

ものが数頭含まれる。H１およびH２の場合,手綱は腰の部分から出ているが,H３では(この図を正面観と考えれば)手綱は左手に握られている。一方,猟犬を操従する鞭は,H１とH３では右手,H２では左手にそれぞれ握られている。

ではこれらの猟師や猟犬と獲物との相関関係はどうなっているだろうか。この点を調べることによって興味ある事実が浮び上がって来るのである。

まずH１の狙う獲物はU１であろう。同様に,H３の場合はU４である。ここまでは特に異議はあるまい。まさしく狩猟の光景である。

問題は,残るU２およびU３である。この獲物を狙っているのは誰か。全体の施文順序[1]からすればU３はおそらくH２に狙われているのであろうが,この猟師H２の場合は,従える猟犬の向きが不安定で,あたかも左右のネコ科動物を標的にしているかのようにも見えるのである。一方,U２の場合は狩猟者自身が不明確で,一部の猟犬を除けばC１のみがこれを襲っている。そして猟師の姿はどこにも認められないのである。

ここに従来よりの見解,つまり豹と有蹄類動物との動物闘争文という図式が繰り返される余地がある。確かに「動物(あるいは家畜)を襲う猛獣を懲らしめる人間あるいは神」のモチーフは,紀元前３千年紀前後のイランに広く認められているところである。問題のネコ科動物を豹と考える限り,そう結論するのが自然であろうし,現状ではそうした見解ですべて落着しているようである。

しかしその出発点に意外な勘違いがあるのでは無かろうか。少なくともアジアに棲息し,斑紋を伴うネコ科動物というなら,ヒョウだけでなくチータの可能性も考慮せねばなるまい。いやむしろ,四肢の長さ,頭部の小ささ,尾の先端の巻き上げ方,そして中黒の斑紋(豹の場合はむしろ梅鉢状で中心は空白),などの特徴からすれば,このネコ科動物を

1）筆者の知る限りでは彩文土器の施文は反時計周りであることが多いが,この事実には陶工の利き腕が関与していると思われる。すなわち,絵筆を持つ手が(予想されるよう主として)右手であったとすると,キャンバスである土器を(左手で)時計周りに回転させながら施文するのが最も効率的であると考えられるからである。昨今の窯業についてもまったく同じ事が言える。無論,土器の上下を反転させて施文するケース(例えば,ウバイド期の浅鉢など)では,施文後に再び通常の置き方をすると,施文はむしろ時計周りに見える。従って,施文が主として反時計周りというのはあくまでも施文時の土器についてであって,鑑賞時の土器についてはその関係が逆転することもある。なお本資料の場合は文様が写実的で,上下を反転させて施文し得るとは思えないから,通常の鑑賞時における反時計周りが成立するであろう。

チータと想定する方が自然なのである。また,尾の先端で斑紋が消えてリング状になっている点も――豹にもその例はあるけれども,どちらかと言うと――チータの特徴である。加えて,眉間から口にかけて一対の黒線(涙状線)が走っているのもチータの特徴で,チータの顔が黒いという印象もここに発する。頭部の塗りつぶし技法もそうした意味があるのかも知れない。ちなみに豹にはこうした黒線が認められず,従って一般に顔が黒いという印象はない。

以上述べたように,このネコ科動物は図像そのものの検討だけをもってしても,豹ではなくむしろチータとする方が妥当であると思われる。豹であろうとチータであろうと,どちらでもよさそうなものであるが,その差は実に大きい。確かに豹とチータは,プリニウスの『博物誌』でさえ明確に区別していないほど互いによく似たネコ科動物ではあるけれども,どちらと認定するかによって天地の違いが生ずるのである。

豹はあくまで獰猛で人に馴れることはない。従ってどこまでも動物闘争文のモチーフに限定される。しかしチータは馴化の容易な動物で,別名を狩猟豹と言うほどに,猟師の補助として存分の働きを見せるのである。ムガルのアクバル帝が千頭のチータを飼って狩猟の友とした話は有名であるが,それ以外にも例えばカイ・カーウースの『カーブースの書』(第18章,狩猟について)には鷹,隼,猟犬などと並んで「ユーズ(イスラームで言うところの狩猟豹,つまりチータ)」が,猟の主役として列記されているのである。サアディーの『薔薇園』(第2章,物語15)にもユーズへの言及がある。ミニアチュールにも狩猟の場におけるユーズの活躍を描いたものは多い[2]。イスラーム陶器もまた同様である[3] この

---

2) 例えば,『アクバル・ナーマ』写本挿画の中の「狩猟するフマーユーン」などの作品がそれである。なお同作品は,平凡社刊1954『世界美術全集』第10巻(サーサーン・イラーン・イスラーム)などに見ることができる。

3) 例えば,小学館『世界陶磁全集21:世界(2)』(1986)のカラー図版42におけるラスター彩人物文鉢(エジプト,紀元12世紀)に描かれた動物がそれである。四肢の長さ,頭部の小ささ,体表の斑紋,尾の先のリング,顔面一対の涙状線――など,いずれの点でもチータの特徴がよく表現されている。にもかかわらず同書の解説では豹となっているが,これは明かな間違いである。この動物と対座する老人との間の親密な関係もチータであればこそで,豹では到底成立しない。その点,学習研究社『体系世界の美術8:イスラームの美術』(1972)の図85(ニシャプール出土陶器,紀元9～10世紀)に関する長谷部楽爾氏の解説は,豹かチータかで迷いながらも「一説には当時この地方で狩りに使われたチータという豹の一種をあらわしたのであるという。」と述べており,比較的正確である。

ようにイスラームにおいては,狩猟豹(チータ)の存在はごくありふれた事実であったのである。

そこで仮に本資料のネコ科動物を素直にチータと推定するとどうなるであろうか。従来のようにこの種のネコ科動物を豹と前提した場合に不可欠の,ぎこちない,もってまわった宗教的・神話的解釈は,一切不要になる。なぜなら,チータは猟犬と共に猟師の補助として狩猟に参加しているだけであり,従って単なる狩猟光景に過ぎないからである。それを豹と考えるから問題が複雑になるのである。そもそも一個体の彩文土器でありながら,一部に猟犬を使った狩猟文が描かれ,別の一部では豹などの闘争文が描かれるというような図像は全体としてまったく意味不明であって,神話的背景でも持ち出して来るほか治まりがつくまい。(事実,そうした解釈は多い。)しかし,農耕文化が軌道に乗った紀元前4千年紀のイラン高原で,「動物闘争文」がどういった意味を持つのか筆者には分からない。

要するに問題のネコ科動物を豹と前提したことからすべての齟齬が生じているのである。と言うよりも,豹でもチータでも大差無いと考え,その識別に意を払わなかったことが根本的なミスであろう。豹とチータは外見的には互いによく似た動物であるけれども,文化史的な観点からは正反対の意味を持つ動物なのである。

以上のことから,このネコ科動物をチータと考え,この図像を単純に狩猟文と解釈する。U1,U4の場合は猟師と猟犬だけが獲物を追い,U2の場合はチータと猟犬,U3の場合は猟師と猟犬とチータの三者協力——こうした各種の狩猟形態を図示したのがこの彩文土器の図像なのである。そう考えるのが最も自然で,おそらく唯一妥当な解釈だと確信する次第である。(なお,H2の従える猟犬が左右のネコ科動物を襲っているかのように見えるが,これはあくまでも猟犬とチータとの関係であって,猟犬と獲物(豹)との関係ではない。)

さて次に問題となるのは,U1,U2,U4の四肢の間に描かれた,列点と斜線からなる格子状の幾可学文である。U4の格子文は斜線を伴っていないが,これは単なる塗り残しであって,本来は他の格子文とまったく同じものと考えてよかろう。またU3には格子文が認められないが,これは単なる塗り忘れ,あるいはスペース不足が原因であろう(ただし,後述するように意図的な塗り残しの可能性もある)。いずれにせよ有蹄類動物の脚間に描かれた格子文は,本資料第二の注目点である。

結論から先に言うと,これこそが追込み猟のための捕獲網であろう。格子文の形およびその配置位置から受ける漠然とした印象もそれを支持するが,無論そういった印象だ

けが根拠ではない。

根拠は，Ｕ２，Ｕ３上方の魚文，およびＨ３上方の動物文にある。それぞれの文様にＵ１脚間などに見られるのと相似の格子文が伴っているが，それがいずれも魚ないしは動物のすぐ鼻先の位置に描かれていることに注目せねばならない。この位置を重視し，猟犬の存在および幾可学文の形を素直に解釈すれば，答えは明らかであろう。魚の場合はいわゆる漁網であり，動物の場合は追込み猟の捕獲網である。だとすれば，Ｕ１，Ｕ２，Ｕ４の胴部下における格子文も同様の意味を付加されていると解釈してよいのではないか。これが筆者の見解である。

実際の話，飛び道具も持たずに猟犬を先頭に立てて獲物を追い駆けたところで，脚力に優る有蹄類動物がそう簡単に捕まる筈が無い。猟師と獲物との間隔が一向に縮まらないからである。（だからこそチータを伴っているとも言えるのだが。）それを解決するにはアッシリアやササン朝における各種の狩猟図が示すように，例えば騎馬の風を導入して騎上から強力な弓矢を放つ他ないのである。

いずれにせよ，猟犬の後からノコノコ遅れて付いて行くようでは，逃げ脚の速い有蹄類動物はそううまくは狩れないであろう。たとえ途中から手綱を放して，猟犬を自由にさせてやったにしてもである。（なお，図像中の手綱の無い猟犬はこれを意味するのかも知れない。）また猟犬（およびチータ）が直接獲物を噛み殺してくれない限り，有力な飛び道具を持たないＨ１以下の猟師に，捕獲のための決定的な手段があるとも思えない。

従ってこられの猟犬は，狩猟を助けるための（今日的な意味の）猟犬と考えるのが妥当であろう。その場合は当然，獲物の追込み先に何等かの捕獲手段，あるいは有蹄類最大の武器であるその逃げ脚を封ずる手段，を用意せねばならない。それがＵ１以下の有蹄類の脚間に描かれた格子文，つまり網であろう。そしてこの格子文が追込み猟の捕獲網であることは，土器頸部付近の魚文や動物文によってなお一層明確に示されているのである。

無論，すべての追込み猟に捕獲網を使用するとは限らない。獲物の逃げ先に先行してその動きを封じ，最後は集団で囲い込んで疲弊させるという，猟犬固有の本能に依存した狩猟もあったには違いない。また，チータの優れたダッシュ力は単独でも十分これを可能にしたであろう。その点ではＵ３の脚間に捕獲網を意味する格子文が描かれていないのも単なる塗り忘れではなく，チータと猟犬だけによる捕獲法を示しているのかも知れない。

いずれにせよこの彩文土器の主要文様帯は，猟犬（そして場合によってはチータ）をも

駆使して獲物を駆り立て,最終的には捕獲用の網でこれを捕えるという,追込み猟の一形態を表現したものと解釈できる。その捕獲網は主要な獲物の脚間に格子文の形で象徴的に示されている。(ただしこれを捕獲網と素直に考えた場合,格子文の形自体は象徴的でなく,むしろ相当写実的と言える。)更にダメ押しとして,同種の格子文が魚文や別の有蹄類動物文の――脚間にではなく――鼻先に描かれ,それが魚網あるいは追込み猟の捕獲網であるということを再度明確に示すという,実に丁寧な心遣いである。

以上の事から,紀元前4千年紀末のイラン高原では有蹄類動物の追込み猟が,――レヴァント地方内陸部のカイト・サイトのように石垣ではなく――捕獲網を用いた形で,実施されていたと推測できる。そしてその際には,猟犬はもちろんのこと,チータをも駆使して,追込みと捕獲の実を挙げていたことが分かるのである。なお,この彩文土器自体はおそらくネハヴァンド地方の首長クラスの人物の副葬品として製作されたものであろう。被葬者が生前に実施した様々な追込み猟を描き,しかもそこに(イスラーム社会でも同じことだが)一般人にはなかなか手の出ないチータの姿まで画き加えることによって,被葬者がいかに富と権勢を誇ったかを誇示したのであろう。「豹」に豊穣への祈りを仮託したのでも何でもないのである。ましてや善と悪のゾロアスター教的観念などとはおよそ無縁の,これ以上はない素直な図像なのである。

4. 問題点

前章ではガラス・陶芸美術館所蔵の彩文土器資料に描かれた狩猟文の持つ意味について検討したが,本章ではそこから派生する二三の問題点について考えてみたい。

まず,手綱の結び方について。本資料の猟師(あるいは勢子)は,猟犬の手綱を自分の腰の辺りにくくり付けている(H1,H2)。おそらく着衣の腰紐にそれを絡めているのであろう。こうした操縦法によって猟師の両手は自由になり,鞭を存分に振るうことも出来たのである。仮に数本の手綱を(ちょうどわが国の鵜飼のように)両手で操作していたら,鞭の適切な使用も困難だったに違いない。

本資料を知った当初は,猟犬数頭分の手綱を腰にまとめて結ぶという操縦法の事例を他に知らず,従ってこれは図像上の便法,もしくは実例だとしてもきわめて特殊な方法と考えていた。しかしその後,猟犬の操縦法について各種の図像を調べてみると,腰に手綱を結ぶ方式が皆無ではないことに気付かされた。いやむしろ,この方式は当時の西アジア世界においてはかなり一般的であったのではないかと考えるに至った次第である。そこでこうした猟犬操縦法の類例を挙げて,本資料の図像が必ずしも特殊例でないことを

図3　テペ・シアルク出土彩文土器片
(Ghirshman 1938, pl. LXXV より)

図4　ルリスタン青銅小像，テヘラン個人蔵
(Exhibition Catalogue 1962, kat. 191より)高さ9.5cm。

図5　ハラト第一神殿出土ネルガル神浮彫り板，バグダード博物館蔵，大理石製(Ghirshman 1966, fig.98より) 高さ90cm。

図6　バダーリ出土彩文土器
(Vandier 1952, fig.192より)縮尺不明。

示したい。

まず,本資料と同時期で,しかも文化的に密接な関係があると思われるテペ・シアルクの事例に付いて述べよう。第Ⅲ-7層出土の彩文土器片(紀元前4千年紀の終盤)がそれである(図3)。片手に鞭,腰に数本の手綱を巻きつけたその姿勢,逆三角形上半身の正面観描写,頭部のみの側面観描写,そしてそれら全体の塗りつぶし技法は,前章までに検討した彩文土器の人物文と酷似している。残念ながら紐の先に何が付帯しているのか本例では確認できないが,上述の共通点から見て,猟犬であるかも知れない。ただし,着衣の一部として腰に豹(あるいはチータ?)の皮や何等かの腰飾りを描いた図像は,例えばチャタル・フユックを始め他の遺跡でも応々にして見受けられるので,本例の場合も単なる腰飾りで終わっている可能性は否定できない。

次に挙げられるのは,ルリスタン青銅器系列の青銅小像である(図4)。二頭の猟犬から延びる手綱は人物の腰を巻いている。手綱と人物の腰とが溶着してあるかどうか明らかでないが,いずれにせよ腰の位置に手綱がくるものと考えて間違いあるまい。なお本例は個人蔵資料のため出土地とその状況が判然としないが,年代については紀元前1千年紀初頭頃と推測される。

ハトラ第一神殿出土のネルガル神浮彫板にも,冥界の番犬ケルベロスの頸から延びる(おそらく3本の)紐がネルガル神の腰紐に結わえられている(図5)。無論,ケルベロス自身は一匹の犬に過ぎないので三本の手綱は必要ない訳だが,頭が三叉に分かれているので頸に巻く手綱の方も三本と想定した。パルティア後期(紀元2世紀頃)の作品と考えられている。

この他に挙げるとすれば唯一,エジプト先王朝時代のバダーリから出土した彩文土器(紀元前5千年紀中頃)がある(図6)。四頭の犬を従える猟師の姿があるが,ここでは四本の手綱のまとめ先がはっきりしない。腰の辺りに止められているようにも見えるが,片手に握られているようにも見える。ただその手には植物らしきものが握られているので,手綱の方はやはり腰の辺りに結わえられていると考えたいのだが,結論は保留すべきであろう。

ごく普通に猟犬一頭だけの手綱を手に握る例は,アッシリアの各種浮彫を始め,枚挙に暇無い。これに対して数頭(と言っても,ネルガル神の場合は一匹で三叉頭)を同時に操作している図像は,きわめて少ないようである。しかし少数とは言っても,その中に上記のような事例が含まれる以上,腰に手綱を結ぶ方式はそれほど特殊ではないと考えられる。

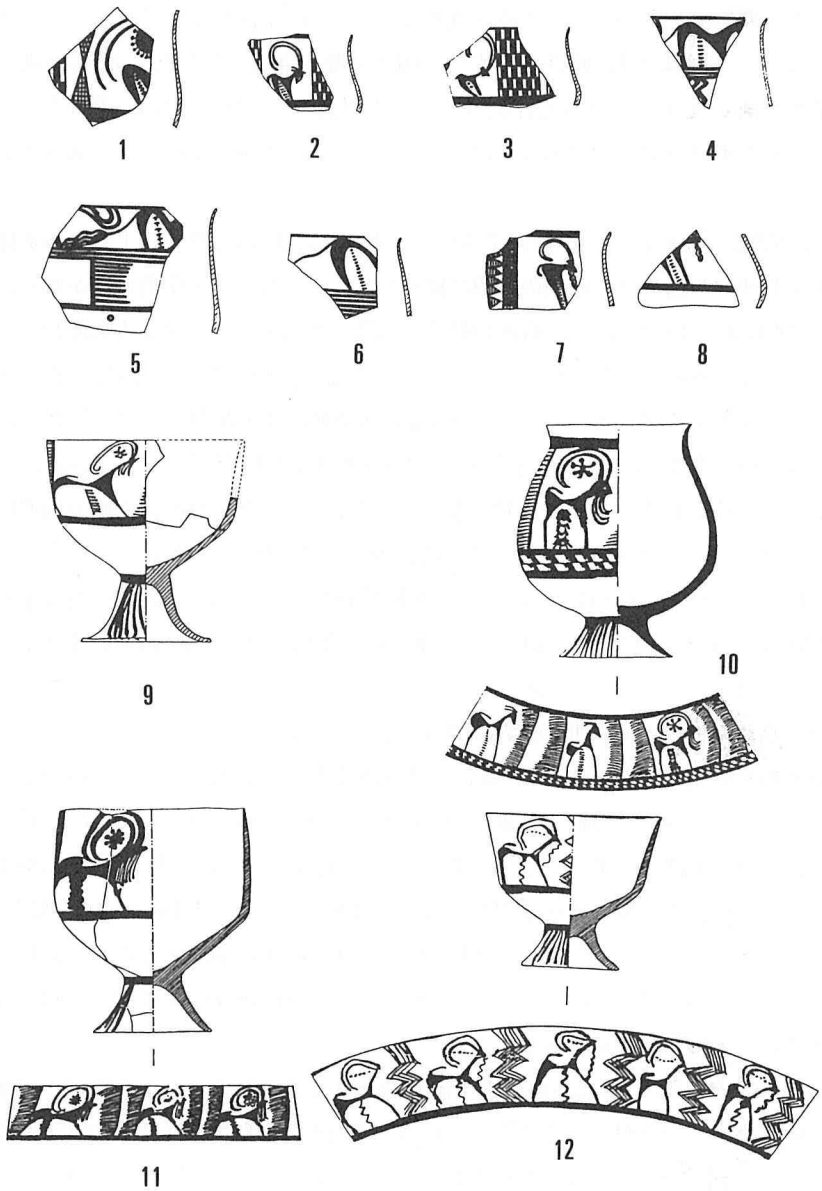

図7　有蹄類動物文における脚間の幾可学文，1－8：Tepe Sialk Ⅲ－7，7b（Ghirshman 1938, pl. LXXXⅡ，LXXXⅢより）；9：Tape Hissar IB（Shmidt 1937, pl.V より）；10-12：Tepe Hissar Ic（ibid., pl. Ⅶ, Xより）縮尺不同。

手綱を腰にまとめる理由は分からない。ごく現実的なことを言えば,体軀が大きく,馬力のある大型猟犬を数頭まとめて引き連れようとすると,腕力では不安定であったのかも知れない。その場合は,(現在でも大型の闘犬の散歩風景に見られるように)腰に巻くのが最も安全で,しかも両手が自由になるという利点も生まれる。なお,筆者としてはこれらの資料も追込み猟の間接的な傍証足り得ると考えているが,その点は別の機会に示したい。

次に,捕獲網の文様について類例を探そう。先述したように,U 1 以下の主要文様では捕獲網を意味する格子文が動物の脚間に描かれている。なぜこの位置に描かれているのか,その理由は判然としないが,有蹄類最大の武器である逃げ脚の速さを捕獲網によって封ずるという呪術的な意味合いが込められているものと思われる。無論,これ以外にも施文の際の実際上の理由もあろう。つまり,有蹄類動物は脚が細くて長いので胴部直下に大きな空白が生まれ,これが格子文の施文に絶好の位置を提供したのであろう。

しかしこの位置にこうした幾可学文があること,そしてそれが追込み猟の捕獲網の表現であるということは重要である。実は紀元前4千年紀後半を中心としたイラン高原(およびパキスタン方面)の彩文土器には,有蹄類動物文の脚間にこの種の幾可学文を置くことが多く,しかもそれらの幾可学文は単なる穴埋めの文様として,これまでまったく注意を払われていなかったのである。

イラン高原における同時期の遺跡を捜すと,テペ・シアルクやテペ・ヒッサールなどに格好の類例を見ることが出来る(図7)。有蹄類動物文の脚間に何等かの幾可学文が描かれているのは,前者ではⅢ-5～Ⅲ-7層,後者では1B,1C層出土の彩文土器である。実際には各種の手法があることが分かるが,いずれも様式化されており,図1の格子文のようにその形態自体が捕獲網を連想させるものは無い。しかし有蹄類動物の脚間という施文の位置,そしてこれらの遺跡と図1資料との地理的・時期的・文化的な密接さから考えて,上述の各種文様が図1資料に見られたような追込み猟用捕獲網の簡略表現である可能性は大いにあり得るだろう。

もしそうだとすると,これらの彩文土器もおそらくは図1の彩文土器資料と同型式の追込み猟を表現した資料ということになろう。これらの遺跡で出土する彩文土器にチータ(豹ではない!)の姿が随所に現わされているのも,そのことを裏付ける。無論,図1の彩文土器資料に見られる格子文と図7の幾可学文との中間的な型式がまだ確認できていない現段階では結論を急ぐ訳には行かないが,その可能性は十分あると思われる。

テペ・ギヤン VD 層ないしはテペ・シアルクⅢ層後半(およびそれに前後する時期の

周辺諸文化,例えばパキスタンのラナ・グンダイのゾブ文化など)の彩文土器に頻出するこの種の幾可学文は,こうした背景を設定して初めてその意味が理解できるのではなかろうか。ついでに言うと,従来は概して前向きに疾走する姿勢を示していた有蹄類動物文が,この時期の前後頃からむしろ急ブレーキを掛けるような,少なくとも立ち止まったかのような,どちらかと言うと後ろよりの姿勢を示し始めたのも,脚間における捕獲網の存在が多少は関与しているのではないかと愚考している。(無論,それは単に様式上の問題に帰するかも知れないが。)

ともかくこれらの資料が図1の格子文と同趣の表現だとすると,紀元前4千年紀後半のイラン高原およびパキスタン方面に,猟犬(そしてチータ)を駆使し,捕獲網を用いた追込み猟が広く実施されていたことになる。実際のところ,図1の彩文土器が出土したネハヴァンド地方だけでこの種の追込み猟が成立し,実施されていたとは思えない。当然,それと同時代の周辺地域では同じタイプの追込み猟が盛んに行われていた筈である。図7の彩文土器が出土した遺跡は図1の彩文土器と同時代で,しかもネハヴァンド地方と密接に関連した文化内容を示しているから,それらの遺跡でも追込み猟が実施されていたと想定するのはごく自然である。そしてその彩文表現がこうした有蹄類脚間の簡略な幾可学文ではないかと考えるのである[4]。

5. おわりに

新石器時代以降の西アジアでは,石鏃や尖頭器などの狩猟用石器が壊滅状態をたどり,僅かにスクレイパーなどの解体処理具だけが——従来の定型的な石刃石器ではなく不定型の剝片石器に後退した形で——残るに過ぎない。ここに,農耕専従の村落経済という新石器時代以降の西アジア社会に関する半ば固定的なイメージの源泉がある。無論その場合にも家畜飼養の側面だけは考慮されているが,狩猟活動の方はほとんど無視されているのが現状であろう。なぜなら,それまで隆盛を極めていた石鏃・尖頭器などの狩猟

---

4) ただしこの種の文様はイラン高原の随所はもとより,ギリシアのアッティカ陶器(例えば,Medvedskaya 1986)にまで及んでいるので,それら全てを追込み猟の捕獲網の表現と想定し得るかどうかは大いに疑問であろう。となると逆に,いかに密接な文化的関係があったにしても,テペ・シアルクやテペ・ヒッサールの事例のみを例外とする根拠をまた別に探さねばならない。ここまでくると説明が難くなるが,筆者は少なくともイラン高原とパキスタン方面の場合は問題の格子文が追込み猟の捕獲網を表現したものと考えている。

関係遺物が,この時期を境に激減するからである。そしてそれこそが生産経済に基盤を置く新石器文化というわけだ。

しかしそうした狩猟関係遺物の衰退と狩猟活動全般の実質的後退とが,正確に連動していたとは思えない。確かに旧石器的な狩猟技術の体系は崩壊したかも知れないが,獲物との直接対決を避けた,いわば新石器的な狩猟技術が新たに開発された可能性は大いに有り得る。事実,新石器時代以降になっても野生動物の骨の出土量が思ったほど減少していない遺跡も多いのである[5] [Meadow and Zeder eds：1978]。だとすればその獲物はどうやって獲得していたのか。交易の存在をある程度考慮しても,それだけではこの矛盾は解決できない。従って,貧弱な石器しか持たない状態で,なおかつ狩猟活動を相当の規模で継続していたと考えざるを得ないのである。

ここに,旧石器的でない新たな狩猟法,つまり狩猟用石器にあまり比重を掛けない狩猟法,の開発を想定する根拠がある。狩猟方法に何等かの変革がもたらされ,農耕の合間を抜った活動だけでも動物蛋白源の需給が可能になったからこそ,逆に農耕も初めて本格的な軌道に乗り得たのではないか。またそれゆえにこそ,狩猟用石器も衰退し得たのではないか。その一例が,内陸部の石垣による追込み猟(カイト・サイト)であり,小稿で検討した猟犬(そしてチータ)と捕獲網とによる追込み猟である。これらとは別に,罠や陥穴などの方法も開発されたに相違ない。事実,『旧約聖書』などはそうした記事で満ち満ちている[旧約新約聖書大事典編集委員会編：1989]。

これら一連の知能的な狩猟活動が狩猟用石器の表面的な衰退現象の裏に潜んでいるとすれば,我々の描いてきた西アジアにおける初期農耕村落のイメージも相当修正する必要があろう。狩猟用石器の衰退は,旧石器的な狩猟経済の後退を意味するだけの消極的な現象であるばかりでなく,(狩猟用石器の必要度の低い)罠や網による新石器文化的な狩猟法の確立を意味する,むしろ実に積極的な現象かも知れないのである。逆説的な言

---

5) 例えば,北イラクのウンム・ダバギーヤ遺跡では野生動物(特にオナーゲル)が山羊や羊などの家畜動物を圧倒している。遺構壁画や石器内容の偏りから,この遺跡で網によるオナーゲルの追込み猟が実施されていた可能性が示唆されているが,筆者も賛成である。ただし同時期のマタッラー,ヤリム・テペⅠ,ジャルモ,ブクラスなどでは,やはりヤギ/ヒツジが多く,明らかに野生種と分かる動物骨の比率は高くない。従って,家畜と穀物農耕とに依存する村落が多かったことはやはり確かである。しかしそれが全てではなく,中には狩猟に依存する遺跡も存在していたという点を強調しておきたい。なおこの点については,註6に記す別稿で改めて述べる予定である。

い方になるが,そうした新たな狩猟法の開発こそが農耕の成立あるいは進展に大きく貢献した――そういった意外な一面もあるのではなかろうか。少なくとも,終末期旧石器文化以来の定住生活が新たな狩猟法の開発を促し,その新たな狩猟法が今度は逆に定住農耕を発展させる陰の推進力となった可能性があるのである。農耕文化の成立に関わる論議の中で,これは大きな盲点であろう。

もちろん小稿で検討した事例は少なく,まだほんの「点」でしかない。西アジアにおける追込み猟全般の系譜を辿るには,今後充塡すべき空白はあまりに多い。それらを埋めて初めて追込み猟の全体像が描けるものと思われる。またチータの問題にしても,イスラームの「ユーズ」と本例との年代差は余りに大きいことを認めねばならない。現在,筆者の手元には関連資料が徐々に蓄積されているので,近い将来発表出来るものと考えている[6]。

(謝辞)本稿の執筆に際して,堀晄氏には貴重な資料の提供を賜り,それについての自由な研究,発表を許可していただいた。末尾ながら,記して謝意を表する次第です。

参考文献

Barnett, R.D.

1975 *Assyrian Sculpture in the British Museum*, McClelland and Stewart Ltd., London.

Contenau, G. and R. Ghirshman

1933 *Fouilles de Tepe Giyan, près de Nehavend*, 1931-32, Paris.

Exhibition Catalogue

1962 *7000 Jahre Kunst in Iran*, Villa Hügel, Essen.

藤井純夫

1987 カイト・サイト――レヴァント地方先土器新石器文化の一側面,『オリエント』29(2):68-84.

Ghirshman, R.

1938 *Fouilles de Sialk, près de Kashan, 1933, 1934, 1937*, vol. I, Paris.

1966 (岡谷公二訳)『人類の美術;古代イランの美術Ⅱ』新潮社,東京.

Helms, S. and A. Betts

---

6)「西アジアにおける追込み猟の系譜」は,『岡山市立オリエント美術館研究紀要』9(1989)に発表の予定である。

1987 The desert "Kites" of the Badiyat esh-Sham and north Arabia, *Paléorient*, 13/1：41-67.

堀 晄

1989 所謂パルティアン・ショットを表現した土器について,『岡山市立オリエント美術館研究紀要』 9：93-105.

カイ・カーウース(黒柳恒男訳)

1969 『カーブースの書』(カイ・カーウース/ニザーミー著,黒柳訳『ペルシア逸話集』東洋文庫134,平凡社,東京に所収)

旧約新約聖書大事典編集委員会

1989 『旧約新約聖書大辞典』,教文館,東京.

Meadow, R.H. and M.A. Zeder eds.

1978 *Approaches to Faunal Analysis in the Middle East*, Peabody Museum Bulletin 2, Harvard University, Massachusetts.

Medvedskaya, I.N.

1986 A study on the chronological parallels between the greek geometric style and Sialk B painted pottery, *Iranica Antiqua*, XXI：89-120.

Oswalt, W.H.

1976 *An Anthropological Analysis of Food-Getting Technology*, John Wiley & Sons, Inc.(ウェンデル・H・オズワルト著,加藤晋平/禿仁志訳1983『食料獲得の技術誌』,法政大学出版局,東京.)

サアディー(蒲生礼一訳)

1954 『薔薇園』 東洋文庫12,平凡社,東京.

Schmidt, E.

1937 *Excavations at Tepe Hissar* (*Damghan*), Philadelphia.

Vandier, J.

1952 *Manuel d'Archéologie Egyptienne*, tom. I：Les Époques de Formation, Paris.